

二 笑ふも泣くも心一

あはれ人の世の中、呪ふたものか、笑ふたものか。呪ふもよからう、笑ふもよからう。呪ふべき時は呪ひ、悲観すべきには悲観するもよいが、又笑ふことも樂觀することも忘れてはならぬ。然り、部分的に呪つて、總體的に樂觀するがよい。徒に現狀に甘んずるやうでは、何事も出来ぬ。須らく發奮の動機を作つて、猛然樂觀に進め。「思うて通へば千里が一里」不愉快な事もあるが愉快が更に多い。嵐吹く御室の山の紅葉々は、哀れにもあらうが、龍田の川の錦となつては、美事千萬ではありませぬか。「散る時が浮ぶ時なり蓮の花」。(句佛上人)

二人以上の人類集まつて生存す、互に相交渉して茲に共同的生存あり、共同の生活端をこゝに發す。既に共同なり、二個以上の人類集まりて始めて共同といふべく、混同に非ず鳥合にあらざる局りは、其の間一定の秩序と一定の聯絡とは保たれて居る筈である。既に相互に關聯して居るとすれば、必ず其の間に義理と人情の纏綿し來るは論を俟たない。所謂、義理と人情との間に夾まれて兩方立つれば身が立たずといった風の、困つた場合に至る事もあり、兎角圓満を缺き易いのは苦しい世の中である。

固より世の中は、智力一點張でも渡れぬ事はない。考究的態度ばかりでも利用的態度ばかりでも行けぬことはない。これは恰も法律のみで世渡りしやうとするやうなもの。たとひ油の切れた車でも、車たる以上動くことは動く。動くは動くが併し動く毎に、ギイ／＼嫌な音がする。乗つて居る人も挽く人も、不愉快である、面白くない。聞かされる近所隣の人も迷惑である、堪つたものでない。而して勞力の多い割合に速力は極めて遅い。若し之に油を注したら如何か。車は軽く愉快に動く、乗る人挽く人は勿論、側の人まで心地よ

い。趣味は人生々活の油である、若し夫れ人生に於てこれならんか、それは誠に無味乾燥で、生活の廻轉は到底覺束ない。共同生活をして圓満ならしめ親密ならしむるものは、其の間自から湧き來る無限の趣味そのものである。貧乏人は、布團と蚊帳を一所に持たぬ。夏が來れば、布團を質に入れて蚊帳を出し、冬が來れば、蚊帳を質に入れて布團を出す。之でもさ「内の家には布團と蚊帳が仲悪で、布團が戻れば蚊帳が出て行き、蚊帳が戻れば布團が出て行く」。こんなでは一年中、爭論の絶間がない。處が同事でも、「内の家では布團と蚊帳とが仲好で、布團が流れやうとすれば、蚊帳が行つて助けてやり、蚊帳が流れやうとすれば、布團が行つて助けてやる」。斯様に云つて御覽、仲々面白い。一所に居なくても、矢張り仲好だ。

法華と念佛とは、昔から仲が悪いと云ふ。一方が念佛無間と云へば、一方は法華で佛になれぬと云ふ。之では争が絶えぬ。「貴宗の日蓮さんは活發で結構です」とやれば、向ふからも「イヤ腕白で困ります、貴宗の法然さんは誠に溫和で有難い」と來る。「イヤどうも少し内氣で」と受ける。爰に互の調和が出來て、同一佛教四海兄弟の實が現はされる。併し何れも表裏の相違で、彼を秋風とすれば此は春風。彼は勇を表にすれば此は仁を表にす。孰も佛智不思議の外はない。「圓い卵も切り様で四角、物も言ひ様で角が立つ」。